

仏教に見る調和社会への道

——「法華経」を基軸に

川田洋一

レリダ大学のビーニヤス学長、フランセスタ・トラデフロート博士（カタルーニャ・ユネスコ協会宗教間対話センター所長）をはじめ、レリダ大学、ユネスコ・カタルーニャ協会の皆さま、ならびにご参加いただきましたすべての方々に、東洋哲学研究所を代表して心より御礼申し上げます。

ここカタルーニャ州における「宗教間対話」は、スペインのみならず欧州の中でも先駆的存在であり、イニシアティブをとってこられたとうかがっております。また、六月には「第四回カタルー

ニャ宗教会議」が開かれると聞いております。

スペインは古来、さまざまな民族が行き交い、文化の融合とキリスト教、ユダヤ教、イスラームが栄え、多様性を通じて国の繁栄を築きあげてきております。このたび私たちは、東洋文明の代表ともいうべき仏教思想と西洋の三大宗教との間に「対話の架け橋」をつくる機会を与えていただいたことに、大変に榮譽を感じております。

すでに、レリダ図書館で「法華経展」を開催しておりますが、法華経の中心思想を織り込みなが

ら、「人類共生」に仏教はいかなる貢献をなしうるかを話させていただきます。仏教が本格的にスペインに紹介されるのは、この今であると思いますので、仏教の基本的な思想を紹介するところから始めたいと思います。

※ ※

1 はじめに

仏教は、紀元前五世紀頃にインドに出現した釈尊の創始した宗教である。⁽¹⁾

釈尊の滅後百年ないしは二百年頃になって、それまで統一を保っていた仏教教団は、上座部と大衆部の二派に分裂した。その後、紀元前一世紀頃までに、上座部と大衆部はそれぞれ分裂を重ねて、約二十の部派が成立した。

分裂以後の仏教を部派仏教と呼んでいる。部派仏教は、僧院の中での、それぞれの学問的な教義を確立していったが、ともすれば複雑煩瑣な学問仏教に偏って

いった。その結果、民衆救済をおろそかにし、宗教としての生命を枯渇させていった傾向性は否定できないところである。

一方、紀元前一世紀頃から、部派仏教に所属する一部の出家者を中心として、大乘仏教の編纂運動が開始されている。大乘仏教は、煩瑣な思弁に陥った伝統的、保守的な部派仏教の一部を激しく批判しながら、一切衆生の成仏(救済)をかかげての新たな運動である。

さて、紀元前三世紀頃、アシヨールカ王(または弟)のマヒンダは、上座部(分別説)をスリランカに伝え、十一世紀以後の東南アジアの仏教の基礎となっていた。一方、インド北西部からシルクロードを通じて、部派仏教と大乘仏教は中央アジアに伝わり、さらに紀元前後頃、中国に伝わっている。中国の仏教は、四世紀頃に朝鮮半島に伝わり、六世紀には日本に伝わった。また、八世紀にはチベットに仏教が伝わった。このようにして、仏教は、アジア全域に流传していったのである。

大乘仏教においては、多くの経典が編纂されたので

あるが、そのなかの初期経典の一つである「法華経」は、歴史的に中国、日本の仏教に大きな影響を与え、民衆に最も親しまれてきた経典である。

「法華経」は、中国仏教においては、天台仏教の中心経典となり、その流れは、日本においては、伝教、日蓮を経て、創価学会・SGIへと引き継がれている。

そこで、本論では、「調和社会の形成」という視座から、まず、仏教の原点である「釈尊の悟達」に焦点を当て、次に「法華経」の中心思想を取り出しつつ、二十一世紀における人類の調和・共生に仏教はいかなる貢献をなしうるかを、たどっていきたいと考えている。

2 仏教の原点——釈尊の悟達

さて、釈尊は、インドとネパール国境近くのカピラヴァストゥという小国の王子として生まれた。二十九歳の時に出家したとされているが、その動機について、「生・老・病・死」という普遍的な「人生苦」を解決するためであったと、古い経典は記している。釈尊は、少年時代から、瞑想的な性格をもち、人生の問題に深

く悩んだことが「中阿含経」に説かれている。⁽²⁾

何人も、自ら老いることをまぬがれないのに、老人を見て嫌悪を感じてしまう。何人も病気の苦しさをまぬがれないのに、病者に嫌悪の念をもってしまう。何人も死を恐れ、死を望まないが、自分にも死がおとずれる。このように「老」「病」「死」の恐れに思いをいたす時、青年の意気、健康の意気、そして生存の意気そのものが、全く消失していったという。

後に、「四門出遊」の伝説となつて伝わっている。⁽³⁾

それによると、王子が東門から出遊して老人を見、南門から出遊して病人に会い、西門から出遊して死者を見て、生には老病死があることを知った。最後に北門から出遊した時、沙門（出家者）に会つて、その姿も心も清浄なるを見て、出家の望みを起こしたという。

釈尊は、出家の後、当時流行していたヨーガの修行をしたが、それに満足できず、もう一つの修行法である苦行に入つていったのである。しかし、六年間の苦行によつても正しい智慧の眼を得ることができず、苦行を捨てて、身心をととのえて、菩提樹のもとで新た

な座禪瞑想に入っていたのである。

釈尊の瞑想は、「自我意識」を基点としての、「内なる宇宙」の探求に向けられていった。即ち、自己自身の、一個の人間生命の内面へと入っていたのである。「自我意識」から「内なる宇宙」の深層領域へと深まるにつれて、探求は個人の次元を超えて、トランスパーソナル（超個）な領域へと入っていく。即ち、家族、友人等の内面と通底する次元から、部族、民族、国家の次元、さらには人類生命の次元にまで深まり、拡大していく。次いで、生態系と共通する地平へ、地球という惑星から、恒星の流転の次元をも突破して、宇宙それ自体と一体となる究極にまで進んでいくのである。

釈尊は、自己自身の生死流転を包含しながら、あらゆる現象界の存在が、相互に関わりあいつつ、時間的にも空間的にも、壮大なる「関連の輪」を広げゆく大宇宙の真実の姿（実相）を洞察していったのである。

そして、釈尊は、ついに大宇宙それ自体の源泉となる「根源的な法」を、自己自身の究極に覚知したのである。

それでは、釈尊の悟達の究極に位置する「宇宙根源の法」とは、いかなる悟りの内実をさすのであろうか。原始仏典の一つ「ウダーナ」⁽⁴⁾に悟達の原点が次のように描かれている。

それは、夕暮れ、真夜中、そして夜明けに、釈尊の口から出てきた詩である。

「夕暮れ詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、そのとき、かれの一切の疑惑は消失する。というのは、かれは縁起の法を知っているから」

「真夜中の詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、そのとき、かれの一切の疑惑は消失する。というのは、かれはもろもろの縁の消滅を知ったのであるから」

「夜明けの詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、かれは悪魔の軍隊を粉碎して安定し

ている。あたかも太陽が虚空を照らすのごとくである」

ここにいう「ダンマ」とは宇宙の根源的なものであり、即ち、「宇宙永遠なる法」の表現である。ここに示されるように、「夕暮れ」の詩では、現象界を織り成す生死流転の「縁起の法」を洞察し、次いで、「真夜中の詩」では、迷いの「縁起」の消滅を知って、一切の疑惑が消滅したと記されている。そして「ダンマ・ダルマ」の顕現は、根源の煩惱である無明（悪魔の軍隊）の断破と同時にあり、ここに「涅槃」の境地が開示されるのである。

釈尊の悟達——それは、釈尊の人格体そのものである「内なる宇宙」を、宇宙根源の生命即ち「ダンマ」が、一切の無明、煩惱を粉碎し、「あたかも太陽が虚空を照らすのごとく」照明しつくす大境地である。この瞬間、「内なる宇宙」は、「外なる宇宙」と一体不二となっている。ここに、「内在」は即「超越」であり、同時に「超越」は即「内在」の悟達が現成している。

玉城康四郎氏は、「ダンマ」について、「『ダンマ』と

はまったく形のない、いのちの中のいのち、いわば純粹生命ともいべきものであろう」と表現されている。この「ダンマ」は、「如来」とも同質であると、玉城氏はいう。⁽⁵⁾

この「ダンマ」が「如来」として大乘仏教の基盤ともなり、一切衆生における成仏の根拠である「仏性」「如来蔵」として展開されていくのである。また、宇宙根源の生命にそなわる「ダンマ」（法）は、悟りの「縁起」の智慧となつて、原始仏教から大乘仏教にまで、大いなる展開をなしていくのである。⁽⁶⁾

原始仏典には、「縁起を見るものは、法を見る。法を見るものは、縁起を見る」とある。⁽⁷⁾縁起の法は、普遍的な真理である。その本質は、次の言葉にあらわれている。

「これあるときに、かれがある。これが生じることにより、かれが生じる。これがないときに、かれはなく、これが滅することから、かれが滅する」⁽⁸⁾

この文の第一句と第三句は、空間的、論理的な縁起であり、第二句と第四句は時間的縁起をさしている。

釈尊から始まって仏教史を貫く「縁起論」の発展は、万物の相互依存関係、また、一と全体、個と宇宙との相即融合を説き示す法理として、現代のエコロジイ思想からも着目され、現代における共生論の創造に貢献しゆく内実をもっている。

さて、「ダンマ・ダルマ」を覚知した釈尊は、八十歳で入滅するまで、東インドの各地を歩きに歩き、衆生救済の慈悲行に生き抜いたのである。この意味において、仏教は「智慧の宗教」であり、その「智慧」は「慈悲」となって発現していったのである。

3 「法華経」と調和の思想

紀元前一世紀頃から起こった大乘仏教は、釈尊の前世における呼び名である「菩薩」の慈悲行に仏教の根本を見出し、「菩薩」の道を宣揚するとともに、「ダンマ・ダルマ」においても、釈尊の悟達そのものにかえり、「宗教的真理」を開示しようとしたのである。

大乘仏教を推し進める人々は、独自の「覚体験」をなし、その禅定の場で「仏との出会い」（見仏体験）を

なしたのである。その「覚体験」の「中核」を、「法華経」では「無上正等覚」として記している。菅野博史氏は『法華経』は釈尊の悟りの原点を自覚的に踏まえて成立しています。このことは、釈尊のダンマの悟りと、梵天勧請による説法の決意という、まさしく仏教そのものの成立に焦点を当てて、『法華経』が制作されていることからわかります⁽⁹⁾。そして、菅野氏は「釈尊は菩提樹のもとでダンマ（法）、サツダンマ（正法）を悟ったといわれる。『法華経』制作者は、このパーリ語のサツダンマに相当するサンスクリット語サツダルマを經典のタイトルに用いて、サツダルマブンダリーカ・スートラとし、諸仏の共通に説く究極の法として位置づけた⁽¹⁰⁾。『法華経』では、「菩薩」のために「無上正等覚」の悟りの法門を説くと宣言している。「法華経」は、「見仏体験」により、「ウダーナ」でうたわれた「太陽」としての「ダンマ・ダルマ」を、「無上正等覚」として覚知することをめざす經典である。

『法華経』には、三大思想が説かれているといわれる。第一に「万人の成仏」、第二に「永遠なる仏」、第三に「菩

薩道の実践」である。この三大思想のなかから、現代における「調和社会」建設のための理念を取り出して
みることにする。



「法華経展」には、多くの市民が訪れ、4月28日から5月16日までの会期中、約5000人が鑑賞した

第一の「万人の成仏」については、まず、方便品で、この現象世界に仏が出現する目的が「一大事因縁」（重大な目的）として説かれている。いわゆる「開示悟入」の「四仏知見」の文である。⁽¹¹⁾

天台によれば、「仏知見」とは「仏性」と同義であるとする。⁽¹²⁾この文によると、すべての人々の生命内奥から仏知見（仏性）を「開」き、「示」し、「悟」らしめ、仏の道に「入」らしめるのが、諸仏の出現の目的であると記されている。釈尊もまた、同様である。

この文から、仏教では、すべての人々が、「仏性」を内在化し、しかも顕現することができることに、「人間の尊厳」性を主張するのである。方便品に示された、「仏性」の内在とその顕在化の一つの具体例として、「法華経」では、女人成仏⁽¹³⁾が説かれてくるのである。

つまり、人種、性別、職業、文化、民族、生まれ、身心の状態等の差異にもかかわらず、すべての人々の生命に「仏性」の内在を認めるところに、すべての人間の「平等」を主張するのである。こうして、人間の心の中に巣くう煩惱——差別、偏見を打ち破っていく

のである。

そののみならず、いかなる人間も、その「内在」する「仏性」としての「可能性」を開顕しうるのであり、ここに、その人独自の個性、特質が開花するのである。

「仏性」には、豊かな善性（愛、慈悲、智慧、勇氣、信、希望）、能力、感性、生命根源力が含まれている。

すべての人間は、その環境との対応のなから、独自の個性や能力等を開花しながら生きているのである。その意味において、すべての人々が他者と「平等」に関わりとは、互いに尊敬しあうことである。

「万人成仏」の思想は、すべての人々が、差別、偏見を乗り越えて、「平等」に敬いあつて「共生」する社会をさしているのである。ここに「人間共生」の姿がある。菓草喻品には、人類のみならず、万物が「共生」する調和社会のイメージが三草二木のたとえとして示されている。⁽¹⁴⁾

大地に三草二木として表象される植物が繁茂している。そこに大雲がおこり、たちまち雨が降り注いでいく。この大雲のおこることを仏の出現にたとえ、仏の説法

が雨にたとえられる。仏の説法は、草木にたとえられるすべての衆生に注ぐのであるが、その宗教的能力によってさまざまな相違が生じるというのが、このたとえの本来の意味である。

三草二木は、それぞれの草木の個性、特質をあらわしている。大宇宙の平等なる働きにうるおされて、万物がそれぞれの可能性を顕在化していく姿のイメージである。日蓮は、個性の特質にに応じての全面開花を「桜梅桃李」と表現している。⁽¹⁵⁾

この草木を人間個人とすると、すべての人々が、個性を開花する姿を示している。次に、草木を、それぞれの民族が創造しゆく文化をさすすれば、すべての文化が、それぞれの特質をもちつつ、開花する姿となる。「桜梅桃李」とあるように、すべての文化が、それぞれの特質を十全に發揮しつつ、開花を競い合うのである。自らの文化に誇りをもちつつも、他者の文化を尊敬し、ともにたたえあうのが、「文化共生」のあり方である。

「人間共生」「文化共生」は、ともに、草木としての自然生態系と「共生」しつつ、この大宇宙のなかでの

人類調和の社会をさすきゆくのである。

第二に「永遠なる仏」の思想は、人類調和の社会の宇宙論的基盤を形成している。

「法華経」では、「永遠なる仏」は如来寿命品で「永遠の釈尊」として明かされている。「法華経」では「釈尊」に即して、その本地に「久遠の釈尊」即ち「永遠なる仏」を洞察してくるのである。⁽¹⁶⁾ 寿命品におけるこの文は、釈尊が、自分が成仏したのは永遠の過去であり、そして、未来についても、成仏してから現在までの二倍である。実質的には未来の寿命も永遠であると示している。

「永遠なる仏」とは、「宇宙根源の法」即ち「永遠なる法」と一体である。それゆえに、永遠なる宇宙根源の法と一体である「永遠なる釈尊」は「永遠の救済仏」である。釈尊は、永遠の過去より、さまざまな手段によって衆生を救済してきたのであり、その大慈悲の活動は、今もなお続いているのである。⁽¹⁷⁾

「法華経」の会座⁽¹⁸⁾では、このような「永遠の仏」「根源の仏」のもとに、全宇宙の分身仏が、菩薩等の眷属を率いて集合してくる場面が描かれていく。釈尊の寿

量品をはじめとする説法を聴聞して、また、全宇宙のそれぞれの場に帰っていくのである。「永遠なる仏」「永遠なる法」のもとに集合し、また宇宙へと遍満していく十方三世の諸仏、菩薩、衆生は、それぞれの役割を演じながら、相互に関わりあい、全体としての「縁起」の網を形成していくのである。それは、まさにダイナミックな「縁起の曲」をかなでゆく宇宙のシンフォニーである。

諸仏をはじめ、すべての存在は、独自の特性を發揮しつつも、相依相資の關係性を通して、宇宙全体の「縁起」のシンフォニーに参画しているのである。「人間共生」「文化・社会共生」「生態系との共生」の基盤にあり、各次元の「共生」のダイナミックな調和に導く基盤であり、原動力こそ、「大宇宙との共生」である。

創価学会戸田城聖第二代会長は、「永遠なる法」と一体となった「永遠なる救済仏」の活動を、宇宙論の立場から、「宇宙仏」の大慈悲行として展開している。

戸田会長は、「慈悲論」のなかで、「この宇宙はみな仏の実体であって、宇宙の万象ごとく慈悲の行業

である。されば宇宙の本来の姿というべきである⁽¹⁹⁾と述べ、この大宇宙に生を受けた人間の使命を次のように記している。

「宇宙自体が慈悲である以上、われわれも日常の行業はもちろん、自然に慈悲の行業そのものではないが、人たる特殊の生命を發動させている以上、人間は、一般動物、植物と同じ立場であつてはならぬ。より高級な行業こそ、真に仏に仕える者の態度である」⁽²⁰⁾。

そして「自覚した真の慈悲に生きなければならない」⁽²¹⁾という。

ここに、仏教の宇宙論的視座から見た、人間としての存在意義と使命がつづられている。即ち、この地球上に生を受けた「人間」という存在の「宇宙論的使命」は、大宇宙の慈悲の行業に参画し、その働きを増幅することである。慈悲の増幅とは宇宙の創造的進化に参画することである。

方便品においては、人權論の基盤ともなる「人間の尊厳」は、すべての人々の内奥に「仏性」がそなわつ

ており、それぞれの状況に対応しながら、その全面的開花が可能であるところに置かれていると説かれていた。さらに、寿命品においては、「仏性」の全面的な開頭のために「永遠の救済仏」の大慈悲行に参画することであると示されるのである。

「永遠なる仏」の慈悲行が、壮大なる「縁起」の網を創造しつつ、宇宙進化をなしゆくのである。それゆえに、この大宇宙の中の「人間の尊厳」は、「永遠なる仏」との共生による慈悲行への参画という「宇宙論的な使命」をはたしゆくところに現われるのである。そして、慈悲行としての「宇宙論的使命」には、他の人間、文化、社会をはじめ、万物との相互尊敬、学びあい、そして資けあう行為と、この大宇宙に生かされている感謝の念が含まれるであろう。このような「使命」に生きる人間群像は、大乘仏教では「菩薩」として登場してくるのである。

第三の「菩薩道の実践」として、「法華経」にも数多くの具体例が示されている。

地涌の菩薩は、釈尊滅後の「法華経」の担い手として、

法師品には「如来の使」⁽²²⁾として、「宇宙論的使命」をはたしゆくことが記されている。また、薬王菩薩は、医学の分野を担い、今日における食糧、水、保健、医療をさし、民衆の健康で長寿の人生に尽くす働きをさしている。

妙音菩薩は、「音楽」に象徴される芸術の創造の働きであり、普賢菩薩や文殊菩薩は、学術、科学、思想への貢献を意味している。そして、民衆の「現世利益的」な要望に耳を傾け、その願いに応じつつ、何ものも怖れない境涯を与えゆく菩薩——無畏者——が観世音菩薩である。

さらに、不軽品には、すべての人々を敬い、あくまでも対話・非暴力によって、「仏性」と善心を開発しゆく菩薩として、不軽菩薩が登場している。悪口罵詈したり、杖木や瓦石で打とうとする人々に対しても、「我れは深く汝等を敬」うという二十四文字の「法華経」を唱え、すべての人々を未来の仏として「平等に尊敬」する菩薩行をくり返したのである。不軽菩薩は、「仏性」とそれにとまなう善心を開発するために、対話と非暴力に徹している。このような菩薩道のなかに、二十一

世紀を担いゆく「世界市民」の理想像を見出せないであらうか。

4 人類調和の社会へ

「法華経」の譬喩品に説かれる「三車火宅」⁽²⁴⁾のたとえのなかに、この現象世界（三界）は生老病死の四苦やその源泉となる「三毒の火」が燃え盛る「火宅」であるとの表現がある。

仏は、このような「三界の火宅」に出現し、大慈悲でもって、三毒の火を消し、衆生の苦悩を救済していくのが使命であると記されるのである。ここに三毒とは、貪欲、瞋恚、愚痴の煩惱をさしている。

貪欲とは、物質、財産、権力、名誉等への執着のエネルギーをさしており、これらの欲望にとらわれると、欲求不満のフラストレーションを引き起こしながら、際限なく増幅していくと考えられている。他者を犠牲にし、傷つけ、他者との相依相関のきずなを分断してまでも、自己の欲求をかなえようとするのが貪欲であり、その結果、自己自身も破滅に追い込まれる。

仏教、特に大乘仏教は、貪欲のコントロールを説くのであって、欲望そのものを否定してはいない。「基本的ニーズ」をかなえる欲望は、自他の幸福のために必要不可欠な善のエネルギーである。しかし、この欲望が、自他を破壊する貪欲と化すことをコントロールしようとするのである。この現象世界では、物質欲、権力欲等の欲望が貪欲と化し、自他を破滅に追い込む煩惱の火となっていると指摘するのである。

次に、瞋恚とは、自己中心性がかなえられないときに生起する怨念、憎悪、恨み、嫉妬、攻撃性であり、それが激しくすると「害」すなわち暴力性となって噴出するのである。暴力も、また、相依相関の糸を断ち切り、他者を傷つけ、破壊しながら、自他ともに苦悩に陥れる煩惱である。この暴力性には、「直接的暴力」とともに、恨みや怨念となって「構造的暴力」を形成しゆく攻撃性も含まれている。

第三の愚痴は、「無明」と同意である。愚痴とは、「真理」、仏教的にいえは「宇宙根源の法」のリズムを破壊してしまう煩惱をいう。「無明」の「明」は、宇宙の「真

理」に明るい智慧の光をさし、したがって、「無明」とは、この光を覆い隠す煩惱である。すでに述べたように、釈尊は、この煩惱の根本にある「無明」を打破して、「宇宙根源の法」を覚知、体現したのである。

釈尊の覚知した「宇宙根源の法」にそなわる智慧が、万物の相依相資を示す「縁起の法」であった。大宇宙にそなわる縁起の法が、大慈悲の働きとなって、「人間共生」「文化・社会共生」「自然生態との共生」を形成していくのである。そのような宇宙大の縁起の法を、その根源から分断し、分裂させ、万物を混迷と苦悩に陥れる煩惱が、愚痴即ち「無明」である。したがって、三毒のなかでも「無明」が根本にあり、そこから瞋恚や貪欲や他の煩惱が引き起こされるのである。

仏教では、この三毒が、個人の生命から激発されて、家族、部族、民族、国家から人類へと広がり、この現象世界全体に充満していく世界を、「火宅」と表現するのである。

また、「法華経」の方便品には、末法という時代相を「五濁悪世」⁽²⁵⁾とも表現している。ここに五濁とは、「煩惱濁」

「見濁」「衆生濁」「命濁」「劫濁」であり、「濁り」とは、三毒等の煩惱によつて、人間生命をはじめ時代そのものが、汚され、生命力をなくし、衰退、混乱している様相をさしている。

天台は、「五濁の次第」⁽²⁶⁾を次のように説いている。

現象世界の「濁り」の根本は、人間生命のなかにある煩惱濁と見濁であり、そこから衆生濁が生まれてくる。さらに命濁となり、劫濁を形成するとの「濁り」の拡大の順序を述べたのである。

煩惱濁とは、三毒である。見濁とは、思想、イデオロギーの濁りである。即ち、偏見、差別、特定のイデオロギーへの執着、過激主義等である。個人の生命が「煩惱濁」や「見濁」におかされると、身心が調和を失つて、抵抗力をなくし、分裂していく。ここに「衆生濁」が形成される。衆生の生命が衰退すると、身心（生命）の継続時間、つまり寿命が短縮化する。これを「命濁」と名づけるのである。

「衆生」を個人の人間生命から、家族、部族、民族、国家、人類へと拡大していくと、それぞれの段階の生

命共同体（社会）やそこにはぐくまれた文化が、煩惱や悪見におかされて、分裂、混乱し、生命力を衰退させて滅亡に向かうのである。個人から発した煩惱や悪見が、各共同体に浸透し、自然生態系とともに、人類がつくり出す時代が混乱し、人類そのものを幾重にも分断し、分裂させるのである。これを「劫濁」と表現している。

「暴力と戦争の世紀」といわれた二十世紀は、まさに、人類全体を巻き込んだ「劫濁」の充満した時代相を呈していた。そして、二十一世紀に入っても、人類は「劫濁」を脱してはいない。

池田SGI会長は、二〇〇一年の「9・11」同時多発テロの直後に、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、ヒンズー教、仏教の各宗教を代表する精神的指導者とともに、アメリカで出版された著『灰の中から——米国へのテロ攻撃に應える心の声』（ロデール社）に、「我々が打ち勝たねばならない悪」と題する一文を寄せている。

そのなかで、SGI会長は、まず、最初に「仏法で

は、『人間の生命は、全宇宙の財宝よりも尊い』と説く。その生命をいとも簡単に踏みじめるテロは、どんな大義や主張を掲げようとも、絶対悪である⁽²⁷⁾』と、仏法者の立場を鮮明にしている。

その上で、人類は長い間にわたり、憎悪とその報復の連鎖をくり返してきた、として、『戦争と暴力の世紀』からの転換を次のように説いている。

『「憎悪」や「破壊」は人々の社会を分断する悪のエネルギーだが、それとは正反対の『慈悲』や『創造』の生命も、これらと同じく、どの人間の生命にも内在している。そのことを互いに自覚し、目に見えぬ生命の絆に結ばれた人類として、分断から結合へ、破壊から創造へと時代のベクトルを大きく変える時が来ている。軍事力などのハード・パワーによる解決は、その本質的な問題解決にはつながらないであろう⁽²⁸⁾』。

そして、『時代のベクトル』まで変えるには、究極的には、たとえ時間がかかったとしても、人間にそなわる善性を信じ、そこに呼びかけ、働きかけていく『文明間の

対話』という地道な精神的営為を、あらゆるレベルで重層的に進めていく⁽²⁹⁾』ことの重要性を指摘している。

さらに、SGI会長は、二年後の二〇〇三年、九月十一日付の『ジャパン・タイムズ』に、『平和建設の挑戦』と題する一文を寄稿している。その中で、『その怒りと悲しみがどれほど大きくとも、私たちは燃えさかる憎悪の炎によって、世界を破壊と分断の方向へと暗転させては絶対にならない。人類は、断固たる信念をもって、平和と共生の未来を志向すべきであろう⁽³⁰⁾』として、まず具体的取り組みをあげている。

第一に、『国連を中心とした実効性のある法制度の整備』、第二に『人々の心をつなぎ、平和の心を育む対話と教育の実践』である。そして、『宗教の使命について』「あくまでも、グローバルな意識を育み、分断された人々を結び付け、自他ともの幸福につながる価値を創造する——その『世界の平和』と『人類の共生』への人間主義の貢献にこそ、二十一世紀に求められる宗教の要件はあるといわねばならない⁽³¹⁾』と述べている。

現今におけるテロ、紛争、戦争としての『直接的暴力』

の勃発の背景には、「構造的暴力」やそれらを正当化するための「文化的暴力」が広がっている。人権抑圧、ジェンダーの問題、極度の貧困と飢餓ならびに「基本的ニーズ」（食糧、水、医療、衛生）の欠如、それを引き起こす経済格差、情報と教育の格差、生態系の破壊が、「構造的暴力」として横たわっており、地球温暖化や世界的な金融危機の広がりとともに、格差等の暴力性はますます増大している。

さらに、これらの問題と不可分の医療技術の進展がもたらす生命倫理の問題も生起している。それは、「五濁」の「劫濁」即ち時代そのものの濁りであり、混迷、破滅の根本に仏教は生命内在の煩惱（悪性）を洞察している。それ故に、この悪性の分断のエネルギーを善性の融合のエネルギーによって打ち破るところから、時代変革の行動を開始するのである。

仏教では、「善性」は、「仏性」に内包されており、具体的には、慈悲、人類愛、非暴力、縁起の智慧、創造力、信、貪欲のコントロール、勇氣、希望等があげられる。「善性」は、個人の生命から生起し、悪性（煩惱）

を打ち破りつつ、人間と人間、社会、自然との共生を通して、生命の絆——縁起の網を広げつつ、「善性」の連帯を築き上げ、人類意識、人類生命意識を養成していくのである。

人類課題に挑戦し、人類調和社会を築くには、SGI会長の指摘にもあるように、国連や教育等の具体的方策、また経済、金融、情報、通信、環境問題への対処等の現実的取り組みや分析が不可欠であるが、それとともに、そのような変革の基盤となる意識や価値観、自然観の問題が統合的に追求されるべきである。「制度」面と「意識」面との統合的変革をめざす、人類調和へのホリスティック（総合的）なアプローチである。その場合、「善性」の連帯によって人間、社会、自然をつなぎゆく意識の変革から、自然観、価値観、ライフスタイルの変革にまで全面的に関わるものが、宗教である。

そこで、最後に、仏教の側面から、「身心の調和」「社会の調和」「自然との調和」の三つのレベルの調和にどのように関わるができるかを、「宇宙論的使命」を

はたしゆく、現代における菩薩道のあり方として、考えてみたい。

第一に、「身心の調和」の次元での宗教の役割は、身体と心の不調和、分裂を癒す「魂の救済」である。これには、各宗教とも独自の修行方法をもっている。次に倫理への貢献である。チュービンゲン地球倫理財団会長、ハンス・キューン氏は、「宗教間対話」における「地球倫理」の形成の重要性を主張している。⁽³²⁾ 地球倫理の源泉となるいずれの宗教にも共通する倫理として、仏教の側からは、「不殺生戒」即ち非暴力・慈悲、「不偷盗戒」即ち他者のものを盗まないこと、「不妄語戒」即ち「真理」に正直であることをあげたい。さらに、「不邪淫戒」という、ジェンダーの平等性を示す戒もあるが、今日では、人種、民族、職業等に関わる「平等性」の主張として拡大することができよう。差別と抑圧という偏見を打ち破る人権の思想である。

これらの人間倫理を、家庭、地域共同体等において根づかせる働きこそ、仏教者の役割と考えている。人間倫理の形成によって、家庭や教育の現場における暴

力性をおさえ、貪欲性をコントロールしうるものであり、麻薬やエイズの流行をふせぐ手だてともなるのである。

現代の菩薩集団をめざすSGIは、日常生活の場で、仏教の学習とともに、座談会や、人々との「対話」を通して、他者の生老病死の四苦と取り組むなかで、これらの人間倫理の形成につとめている。むしろ、この分野には、医学や教育心理学等の学問との協調が要請される。

第二に、「社会・文化の調和」「人類平和」の次元であるが、「核廃絶」「持続的開発」「経済的不公正の是正」にむけての種々の政治的、経済的方策が実行に移されている。

そのなかで、現今、国連を中心として、「人間の安全保障」「人間開発」というコンセプトが提示されている。安全保障、開発というのも、「人間」が中心になればならないという問題提起である。ここには、人間の価値観、生き方、ライフスタイルの変革が含意されている。仏教は、「安全保障」においては、「非暴力」をかかげ、「開発」においては「少欲知足」の生き方を主張している。「少

欲知足」とは、すべての人が「基本的ニーズ」を満たす生き方である。「少欲」とは貪欲のコントロールであり、貪欲に支配されるのではなく、人間としての本来的な欲求を生かすことである。そのうえに、各自が精神的価値、実存的価値を追求しながら、「善性」の連帯を広げ、共生・調和の社会を創出しようとするのである。少なくとも、貪欲性によって、他者のものを奪ってはいけないという倫理性を貫く生き方である。

さらに、人権問題については、仏教は、すべての人々が、釈尊と同じく、「永遠の法」と一体の「永遠の仏」の生命を内在しており、しかもその智慧と慈悲を發揮できるとする。つまり、「万人成仏」を説く宗教であるから、「平等性」は、全人類に及んでいく。また、現今の、人種、民族、宗教間の対立、紛争については、仏教では、「縁起の法」にもとづいての「寛容の精神」を發揮することを主張している。

仏教では、相依相資の縁起の網を分断するのが煩惱であるから、各宗教とともに三毒（煩惱）を打破しあいながら、「善性」を開顕し、それぞれの独自性を發揮し、

協力しあっていこうと考えている。ここに、仏教者から見た「文化共生」が示されることになる。このような考え方にもとづいて、SGIでは、国連NGOとして、世界不戦や人権問題を扱う各種の「展示」、各民族・文化の相互交流、世界の子どもたちの「絵画」を通しての教育等を行っている。当研究所では、「寛容の精神」を根本に、「宗教間対話」「文明間対話」を継続している。また、教育の分野では、創価学園、創価大学によって、平和教育、人権教育、自然教育を通しての世界市民の育成に努めている。また、難民救済のための努力、医療団の派遣等を行っている。

第三の、「自然との調和」の次元であるが、仏教の自然観は、「大宇宙との共生」にもとづき、万物とともに現象界に生かされることへの感謝の念によって、大自然とともに生きる人生を指し示している。「持続的開発」の思想的基盤は、自然との「共生」であり、それを可能にするライフスタイルである。地球温暖化をはじめとする「地球的問題群」への対処には、政治、経済、科学技術の具体策とともに、それを支える人間意識の

変革が要請される。地球資源を浪費しない、リサイクルを徹底する、精神的価値に生きがいを見出す等の生き方から、さらに、「人類共同体意識」へ、そして「地球生命意識」の涵養へと進むべきである。

また、この次元では、遺伝子工学をはじめとするライフ・サイエンスを人類がどのようにコントロールしていくかという、宗教に課せられた問題も重要である。

S・G・Iは、以上のような考え方によって、各地域でのリサイクル運動、自然保護運動に参画するとともに、国連NGOとして「環境展」を開催し、ブラジル・アマゾンでは熱帯雨林の研究と植樹を行っている。また、仏教者の立場からの「生命倫理」への関わり方を、具体的に提示している。

以上のような、仏教の人類調和社会へのアプローチのなかに、他の宗教の方々の具体的「接点」が種々示されたのではないかと考えている。特に、西洋の三大思想との「接点」を結びながら、ここカタルーニヤからスペイン・欧州へと、さらに全世界へと、ともどもに「対話」「交流」「協調」への「善性」の連帯の輪

を一段と広げていきたい。また、私どもは、本日のシンポジウムを契機として、さらに、人類が直面する課題——平和、環境、人権、倫理等について、仏教と西洋側の双方から意見を交わすことを願っている。

注

- (1) 釈尊の生没年代については、紀元前六世紀から五世紀という説と、紀元前五世紀から四世紀という二説がある。平川彰『インド仏教史』春秋社、三二―三四ページ。
- (2) 「中阿含経」巻二九、『大正蔵』第一巻、六〇七ページ下
- (3) 「修行本起経」巻下、遊観品
- (4) 玉城康四郎著『仏教を貫くもの』大蔵出版、四一―四二ページ
- (5) 玉城康四郎著『仏教の根底にあるもの』講談社学術文庫、二三―二七ページ
- (6) 縁起の思想は、原始仏教から大乘仏教に至る、すべての仏教の中心思想であり、仏教各派の中で業感縁起論、阿頼耶識縁起論、如来藏縁起論、華嚴宗の重々無尽縁起論、真言宗の六大縁起論、また天台宗の諸法実相論（一念三千論）等となって展開していったのである。
- (7) 「中阿含経」巻七、『大正蔵』第一巻、四六七ページ上
- (8) 縁りて起ること（縁起）、池田正隆訳『ブツダのこ

とばIV 原始仏典六』講談社、六七ページ

(9) 菅野博史『法華經の出現』大蔵出版、一六ページ

(10) 菅野博史『法華經入門』岩波新書、一八ページ

(11) 「諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なる

ことを得しめんと欲するが故に、世に出現したまう。

衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現した

まう。衆生をして仏知見を悟らしめんと欲するが故に、

世に出現したまう。衆生をして仏知見の道に入らしめ

んと欲するが故に、世に出現したまう」『妙法蓮華經

並開結』創価学会、一一一ページ

(12) 菅野博史『法華經——永遠の菩薩道』大蔵出版、九五

ページ

(13) 女人成仏。法華經提婆達多品で、八歳の竜女の即身成

仏を現証で示し、女人成仏が説かれた。

(14) 「迦葉よ。譬えば三千大千世界の山川・谿谷・土地に

生ずる所の卉木・叢林、及び諸の葉草の如し。種類は

若干にして、名色は各おの異なり。密雲は弥く布き、

遍く三千大千世界を覆い、一時に等しく澍ぐ。……一

雲の雨らす所なるも、其の種性に称いて、生長するこ

とを得、華菓は敷き実る。一地の生ずる所、一雨の潤

す所なりと雖も、諸の草木に各おの差別有り」『妙法

蓮華經並開結』二四一〜二ページ

(15) 『日蓮大聖人御書全集』七八四ページ

(16) 「一切世間の天・人、及び阿修羅は、皆な今の釈迦牟

尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、

道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり。

然るに善男子よ。我れは実に成仏してより已来、無量

無辺百千万億那由他劫なり」『妙法蓮華經並開結』四

七七〜八ページ

(17) 「是れ自從り来、我れは常に此の娑婆世界に在つて、

説法教化す。亦た余処の百千万億那由他阿僧祇の国に

於いても、衆生を導利す」『妙法蓮華經並開結』四七

九〜四八〇ページ

(18) 法華經説法の会座の一つに虚空会がある。見宝塔品第

十一から、嘱累品第二十二までの十二品は、虚空会の

儀式が行われる。見宝塔品で、三世十方の諸仏(分身仏)

が結集し、如来寿量品第十六で「久遠の仏」が明かさ

れる。如来神力品第二十一で、地涌の菩薩への付嘱、

嘱累品第二十二で一切衆生の菩薩への付嘱が行われ、

分身仏は全宇宙へと帰っていくのである。

(19) 『戸田城聖全集』第三卷、聖教新聞社、四四四ページ

(20) 同書、四五五ページ

(21) 同書、四八四ページ

(22) 『妙法蓮華經並開結』三五七ページ

(23) 二十四文字の法華經。「我深敬汝等、不敢輕慢。所以

者何、汝等皆行菩薩道、当得作仏」『妙法蓮華經並開結』

五五七ページ

(24) 「大慈大悲にして、常に懈倦無く、恒に善事を求めて、

一切を利益す。而も三界の朽ち故りたる火宅に生ずる

こと、衆生の生老病死、憂悲苦惱、愚癡暗蔽、三毒の

火を度し、教化して阿耨多羅三藐三菩提を得しめんが
為めなり」『妙法蓮華経並開結』一七二ページ

(25) 同書、一二四ページ

(26) 『法華文句』卷四下、『大正藏』第三四卷、五三ページ

(27) 『聖教新聞』二〇〇一年十月三十一日付

(28) 同

(29) 同

(30) 『ジャパン・タイムズ』二〇〇三年九月十一日付

(31) 同

(32) マジッド・テヘラニアン／デイヴィッド・W・チャペ
ル編『文明間の対話』潮出版社、一〇五ページ。

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)